うめくさ－12

北方の雑草ゴボウ

北海道では都市部の路傍や浅い山林などにゴボウが生育していて，時には人を驚かせる。あるメーリングリストの記事にも，「オヤマボクチの花を上向きにしたような植物で，札幌の市街部に普通にみられ，野生植物の図鑑では解らず，園芸植物の逸出にしては地味な花なので悔しくも私には謎でした。(naturplant:1485，札幌のアザミsp. とオオムラサキツユクサ kano koide)」とあった。「北海道帰化植物便覧－2000年版－(五十嵐博　2001)」には北海道におけるゴボウの分布図があって，札幌を中心に全道に分布するものの，知床半島では空白になっている。ここでは「ノラゴボウ」の名も与えられている。

ゴボウは，発芽して生育した後，1年目には根を太らせて地上部を枯らせて越冬し，翌年に地上茎を伸ばして開花・結実し，秋に全体が枯死する典型的な二年生植物である（図－1，2）。野菜として生産される畑では，1年目に根の太ったところで収穫されるので，そのままでは翌年の開花・結実に至る個体は残らない。北海道でも路傍に生育するゴボウを1年目に皆収穫してしまえば，根絶やしにできるのであろうが，すでにそれができないほどに拡がってしまったわけである。1979年に北海道農業試験場を退職されてから北海道の作物の歴史を探究された故山本　正氏の労作「近世蝦夷地農作物年表（北海道大学図書刊行会　1996)」によると，北海道へのゴボウの導入は「土性弁（佐藤信景著・佐藤信渕増補　1724)」にある「天保7～9(1694～96) 年　オナセム。牛蒡・莢箙・胡蘿蔔等蒔テ試シニ，皆能繁栄シ」というのがはじめのようだ。天明6 (1786) 年の「蝦夷拾遺（佐藤玄六郎)」の「艸（キナ，ムニ）木（ニ，チクニ)」にも，「牛房（セタマ(コ)ロコニ)」とある。

知里眞志保氏の「分類アイヌ語辞典　第一巻　植物篇（日本常民文化研究所彙報第六四　1953)」での牛蒡の項には次のように解説されている。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

(1)seta-korkoni [seta（犬）korkoni（蕗）] 葉柄《幌別》
(2)sita-korkoni [sita（犬）korkoni（蕗）] 葉柄《様似，足寄，芽室，屈斜路，美幌》
(3)seta-kina　[犬・草] 葉柄《白浦》
(4)ipakokarip　[i（我らの）pa（頭）ko（に）kari（からみつく）p（もの）] 果実《美幌，屈　斜路》
（参考）葉を「シと」(sito　しとぎ　粢）に搗きまぜて食べ，根も汁の実にした。葉わまたもんで傷口につけ或いわ腫物の膿を吸い出すのに用いた(幌別)。

図－1　札幌の市街地でも見られるゴボウ(花期)

図－2　2年目の春に萌芽したゴボウ

果実わ多量に採集して「プ」(pu　倉）の下の地面にまき散らし，また「ぷケマ」(pu-kema　倉・脚）に結びつけておくと，鼠が恐れて近ずかぬとゆう（美幌，足寄）。この果実わ體に着くと離れぬので，熊もそれを見れば恐れて近ずかぬとゆう（美幌，屈斜路）。それで，山中の川端に建てて凍鮭を貯えておく「にプ」(ni-pu「木・倉」）の下にわ必ずこれを大量にまいて野獣の襲撃を防いだ（美幌）。この果実わ誰の體にも遠慮なく附着するので，人間でも無遠慮な者のことを「イぱコカリプネナン」(牛蒡の実の様だ）とゆう（屈斜路）。

ゴボウはよほど北海道の気候・風土に合致していたものとみえて，アイヌの人々の生活にも深く入り込んでしまった植物であったことが伺える。明治のはじめ，北海道への移住案内の中には，「ゴボウが道ばたに生えている」という記述もあったそうだ。この記事で釣られて移住したゴボウ好きの人々もいたのであろうか。現今，札幌第１の繁華街ススキノにも昔はゴボウがあって，明治５年頃の様子が「・・・薄野の長谷川楼辺より水原リンゴ園にかけて大なるゴボウあり，あたかも樹木の如し。ただし実は小なり。(篠路に大ゴボウ多し）・・・（河野常吉編　さっぽろ昔話－明治編上－，みやま書房　1978)」と古老の言が採録されている。

戦前の樺太でのゴボウの状況は以下のように記録されている（石山哲爾，南樺太産有用野生植物　Ⅰ．後生花被亜綱，樺太中央試験所報告第一類　第一号　1932)。

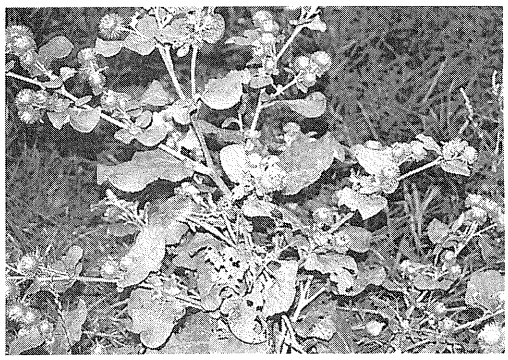
産地　村落附近の路傍或は草生地に生じ，本島内の各地に産す。

分布　亜細亜及欧州の原産なるも現時北米及南米にも伝播す。

本種は先に述べし如く栽培品の野生化せるものにして，而も現時通常栽培せらるる蔬菜作物の一なるを以て，之を純粋なる野生植物と見做し得ざるは勿論なるも，蔬菜として根を食用に供する他，各種の利用法存するを以て参考として此処に記す。

なお，樺太庁中央試験所は「彙報第22号」でも「南樺太産食用野生植物（木本氏幹・白阪信巳　1936)」を出しているが，これにはゴボウは掲載されていない。樺太のゴボウが北海道経由のものなのか，中国やシベリアを経由してヨーロッパから入ったものなのかはよくわからない。これより先，明治39(1606)年５月に樺太民政署の嘱託を受けて樺太の植物調査に赴いた札幌農学校の宮部金吾教授と三宅勉農学士の復命書「樺太植物調査概報　1970」の「食用植物」「八四ごぼう　菊科　Arctium happa L. Setakina 其根ヲ食スヘシ」とある。「happa」は「lappa」の誤植である。

ヨーロッパでは全域にわたって*Arctium lappa* L（ゴボウ）と *A. minus* Bernh., *A. tomentosum* Millerが雑草として分布しており，ゴボウは，枝分かれした花茎に頭花が傘形に配置されていることで他の２種と区別される（The Arable Weeds of Europe, Hanf, BASF 1983)。ヨーロッパの稲作北限であるハンガリーを訪問したときに，ゴボウを見た（図－３)。日本から研究協力にきていた専門家の奥方が，「ゴボウじゃないんでしょうか？」とおっしゃるので，「ゴボウですよ。」と答えたところ，たちまちに根を引き抜いて実に満足そうな顔をされたのを覚えている。ずっと南，九州では名産のタカナがあちこちで逸出しているが，北方でのゴボウのようには注目されない（も）



図－３　ハンガリーに雑草として生えるゴボウ